

## 山の森林と都市の森林

2021/12/10 自然環境部 陸域担当チーム 田口 敦史

今回のページ上部、タイトル背景画像をご覧になって、エコ森林はいつ見ても緑豊かでないところ、なんて思ってしまった方がもしいたら、ごめんなさい。ココは、エコ森林ではありません。

図-1の、赤枠の中が撮影場所です。苫小牧の沼ノ端駅北側に広がる新興住宅地のなかにポツンと取り残された自然林で、樹齢100年を超える木々も立ち並ぶ、苫小牧市自然環境保全地区※1のひとつ、沼ノ端拓勇樹林地区(通称：拓勇樹林)です。

今ではポツンとしているこの樹林ですが、昔はどうだったのでしょうか？図-2は、今から46年前、1975年の状況です。私ごとですが、私が生まれたのは1976年で、札幌の発寒で生まれ育った小さい頃の記憶では、この写真同様、森は身近にあり、良い遊び場でした。

しかし、今は人間社会にとって使い勝手が良い都市近郊の平地は、そのあらかたが住宅地であったり、工業用地であったりと、開発が進められてきました。森は、公園として立木が残ればまだいいほうで、林床は芝生、下枝をはらって見通しよく、というのが普通になってしまいました。

苫小牧市は、この拓勇樹林を「市街地近郊にあるにもかかわらず、自然の状態に残っている。※1」と、公園にはせず保全してきましたが、現代の市街地には異質な場所となっています。周囲に住む人々からは何の場所？という疑問、倒木被害の心配、落ち葉がひどい、といった苦情も聞かれるようです。



※出典：国土地理院 (<https://maps.gsi.go.jp/>)  
図-1 拓勇樹林周辺(2018年)



※出典：国土地理院 (<https://maps.gsi.go.jp/>)  
図-2 拓勇樹林周辺(1975年)

※1：苫小牧市自然環境保全地区(<https://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/shizen/shizenhogo/sizenkankyo/kakuhozenchiku.html>)

都市化が進む平地と比べ、エコ森林のような山地は、人間社会にとっては使いにくい場所です。急斜面があったり沢筋が谷になっていたり。家など建物を建てるにも、車を動かしモノを運ぶにも、平地より余計に労力がかかります。エコ森林がそうであるように、山地には人の手が入らない場所が現代でも広く残っていて、北海道でいえば、面積のうち70.6%が森林、さらにそのうち68.7%が天然林とされています※2。

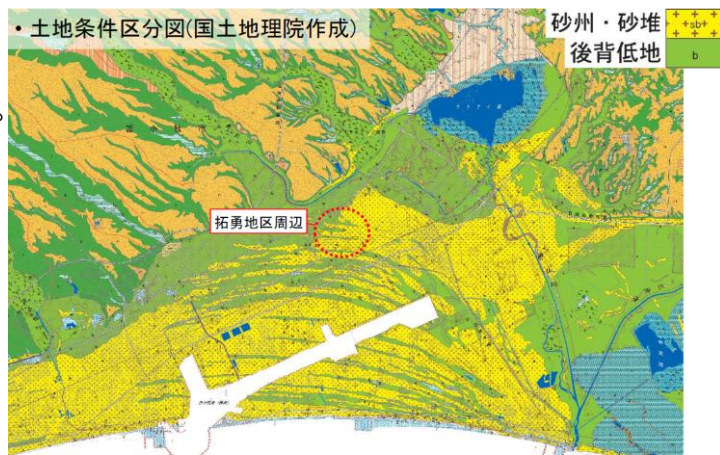
この数字からは自然豊かに思える北海道ですが、都市に近い平地ではどうでしょうか？ということで、ご覧頂きたいのが図-3です。拓勇樹林のある苫小牧東部がもともとどんな土地なのか、を示した「土地条件区分図」です。

太平洋側から、黄色の「砂州・砂堆」が広がり、弧状の縞模様で緑色の帯、「後背低地」がその間にあります。これは、約8,000年前の「縄文海進」の名残です。川が山から海へと砂を運び陸地化し、海岸には波の作用で砂丘が出来て、その後背へ山からの水が溜まって湿地化する、を海岸線が退くとともに繰り返して出来た平地で、山地とは違う、この地域の特徴です。

この土地条件での、もともとの自然の姿、生き物や森林は今、どうなっているのでしょうか？そこは先ほど図-1でもご覧いただいたとおり、平地のほとんどで人の手による開発が進められてきました。今も手つかずのまま残っているのは、これも人間社会にとって使いにくい湿地、沼地などです。砂州・砂堆と後背低地が折り重なる、本来の苫小牧らしい土地条件にある森林は、実はごく僅かしか残っていないのです。

昔はどこでもハスカップ(クロミノウグイスカグラ)の実がとれた、大事な食糧だった、そんな昔話を苫小牧の年配のかたからよく聞きます。かつてあったそうした場は家や工場になってしまい、身の回りから姿を消してしまいました。

都市のなかにありながら、今もかつての姿を残す貴重な拓勇樹林を、今後どう保全していくか。弊社では、それを苫小牧市とともに考える仕事に昨年度従事させていただきました。



画像出典: 国土地理院ウェブサイト(<https://www.gsi.go.jp/kankyochiri/shitsugenchousa-seika.html>)

図-3 ウトナイ湖周辺の土地条件区分図

我々の得意とする生き物の調査では、絶滅危惧種を含む市街地の一角とは思えない生物相など、苫小牧らしい自然が確認されました。その一方で、樹林内のそこかしこで確認されたのは、不法投棄されたゴミ、刈草、畑や植木鉢の中身の残骸。どこの庭から来たのか、春にはクロッカス、夏にはカンパニュラの仲間が咲くなど、人間社会の影響による「苫小牧本来の自然」ではないものも目の当たりにしました。

調査の一環で実施した住民アンケートでは、今後の拓勇樹林のあり方として、自然保護のため誰も立ち入れるな、との意見がある一方、人の関わりやすい、環境教育の場になるような森が良い、という意見、市街地で中途半端に自然を残しても仕方ない、自然が良いなら山へ行けば良い、といった意見までありました。

都市の人間社会に残された自然を、どう守っていくか。いま、多様な住民意見も踏まえ話し合いが進められているところです。

昔、拓勇樹林のような市街地に隣接する森で、こんな言葉を聞いたことがあります。

「こっち(森)は、自然だね。素晴らしいね。じゃあこっち(街)は？自然の反対だから、これは「不自然」っていうんだよ。」

都市に残る拓勇樹林は、「自然」を身近で大事な本来の姿と感じ、私達の生活の「不自然さ」を感じられることに、残す価値があると私は思います。

※2：北海道データブック2021\_林業(<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tkk/databook/70723.html>)